一九一〇年の「純日本種狼」
―「最後のニホンオオカミ」をめぐる論争と資料―

長野　栄俊

はじめに

ニホンオオカミは、最新の「環境省レッドリスト２０２０（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）」では「絶滅（ＥＸ）―我が国ではすでに絶滅したと考えられる種」のカテゴリーに位置づけられ、『レッドデータブック ２０１４』（ぎょうせい）では次のように解説されている。

オオカミ（*Canis lupus*）の小型の亜種で、本州、九州、四国の山地に生息していたらしいが、一九〇五年一月に奈良県鷲家口で捕獲された若いオスを最後に本亜種と確認できる個体の記録はない。この後まもなく絶滅したと考えられる。

すなわち、ニホンオオカミ（*Canis lupus hodophilax*）の最後の確認事例は、明治三八年（一九〇五）一月、奈良県吉野郡小川村鷲家口（現東吉野村）でのこととされる。この時捕獲されたオスの個体は、アメリカ人採集家Ｍ・Ｐ・アンダーソン（Malcolm Playfair Anderson）によって八円五〇銭で買い取られ、出資者である第一一代ベッドフォード公爵（Herbrand Arthur Russell）の手に渡った。その後、標本は大英博物館に寄贈され、現在は大英自然史博物館に収蔵されている。

以上がニホンオオカミ絶滅に関する通説である。ところがこの鷲家口の事例から五年後の明治四三年（一九一〇）、福井市内で「日本産の狼」と鑑定された個体があった。当時、一般にニホンオオカミはまだ絶滅したとは考えられていなかったと思われるが[1]、やはり街中での出現例は非常に珍しく、また幼児が咬まれる被害もあったことから他府県の新聞でも報じられるニュースとなった。

本稿の目的は、この時福井に現れたオオカミ（以下、便宜的に「福井オオカミ」と称する）の関連資料を総覧し、出現の経緯やその後の取り上げられ方を整理することにある。ただし、筆者は動物学的

な考察を行う能力は持たないため、福井オオカミの種を特定することを目的とするものではないことをあらかじめ断っておく。

一　福井オオカミが注目を集めるまで

明治時代の末に福井オオカミが捕殺されて以降、長らくこの事実が注目されることはなかった。これが再び脚光を浴びるきっかけとなったのは、半世紀後の一枚の写真の発見であった。まずはその経緯をたどるところから始めたい。

（一）一九六一年一二月、写真の発見

昭和三六年（一九六一）一二月五日、『福井新聞（夕刊）』は「貴重な写真集を寄贈　武生市の野路氏が福井歴史館へ」と見出しを打ち、寄贈された写真の中に「福井に現われたオオカミといわれる動物の写真」**［写真一］**が含まれていたことを報じた。

寄贈者の野路定吉は、明治四三年（一九一〇）福井市佐佳枝中町（現福井市順化一丁目）に野路写真館を開業し、昭和一七年頃まで写真師として活躍した人物という。[2]

写真一　福井市立郷土歴史博物館蔵

記事本文は「明治時代に福井にオオカミが現われ大騒ぎになり射殺したが、そのオオカミの写真もある」とする一方、見出しには「福井で射殺のオオカミ?も」と小さく疑問符を付しており、また別の箇所でも「オオカミの可能性も大きい」として可能性の指摘にとどめている。この段階では、写真の動物はオオカミと断定されていないため、「専門家の鑑定でオオカミとわかれば（中略）動物学的資料としても興味あるものとなる」と記事は結ばれている。

（二）一九六一年一二月、今泉吉典による鑑定**［資料一］**

翌三七年（一九六二）一月一日、『福井新聞』は続報を載せ、「日本最後のオオカミ」「明治末福井市で射殺　野路氏（武生市）の写真を国立博物館へ　鑑定の結果〝確実と思う〟」との見出しを打った。リード文には「明治末期に福井城内に現われ射殺された動物が、その写真から動物学的に貴重なニホンオオカミであることが東京・上野の国立科学博物館の調査でわかった」として、写真一の動物をニホンオオカミとする説をほぼ断定的に報じている。

前年一二月、福井新聞の記者[3]が上野動物園に写真を送って鑑定を求めたところ、同園長の古賀忠道から国立科学博物館の今泉吉典（一九一四～二〇〇七）に写真は回送された。

今泉は、昭和三六年二月に「アカネズミ群 *Apodemus speciosus* group の分類学的研究」で北海道大学より理学博士号を授与された動物学者で、翌年同館動物課長、同四一年には動物研究部長に就任

する。また、昭和四〇～五六年には哺乳動物学会の第二代会長を務めるなど、戦後の哺乳動物学とりわけ分類学を牽引した一人であった。[4] この時期の主な研究対象は小型哺乳類だったが、写真一や福井新聞の取材内容を検討した結果、「頭が大きく顔が長い点、ストップ（頭から口へかけての角度）がないこと、耳が小さい、足が長く、後ろ足の地に接する部分が長い」などの点から「野犬ではなくニホンオオカミだと思います」と鑑定結果を記者に伝えた。

また、オオカミ研究家の斎藤弘吉（一八九九～一九六四）も今泉から写真を渡され、鑑定に「疑う余地はないとの結論」に達したと記事は伝えている。斎藤は昭和三九年に研究の集大成として『日本の犬と狼』（雪華社）を刊行する在野の日本犬研究家である。

なお、本記事は写真の撮影状況についても詳しい。福井城内の松平家屋敷付近に現われたものを鉄砲で射殺し、その翌日に「現在のくまがい児童公園付近」（現福井市中央公園）で野路が組み立て式の写真機で撮影したものという。

撮影時期については、「明治四十三年以降のものであるのは確実。野路さんの記憶は四十三年ごろ」とする。しかし一方で、射殺されたオオカミを見たという福井市立郷土歴史館（現福井市立郷土歴史博物館）の谷口初意主事の記憶を交えて「明治四十四、五年と推定される」とも述べており、この時点ではまだ特定されていない。

（三）一九六二年一月、読者からの情報［資料二・三］

昭和三七年（一九六二）一月一七日、『福井新聞（夕刊）』は読者からの情報をまとめる形で更なる続報を載せた。見出しは「日本最後のオオカミ　射殺後「はく製に」」「一時学校に保存　現存せず戦災で焼失か」として、福井オオカミの剥製化に焦点が当てられた。

小見出しには「オオカミの出所はわからず」とあり、「当時小山谷方面でオオカミがたびたび現われ農夫と格闘したことも何度もあるところから、郊外の山からきたのではないか」とする推測や「当時足羽河原に矢野という動物園があり、ここから逃げ出したという伝説」、また「オリから逃げ出したもの」とする指摘などが寄せられたと記事は伝える。

また捕殺場所については「片町に現われ浜町方面へ逃げ足羽河原で消防団員が殺した」との回想がある一方で、「福井城内の松平家屋敷に逃げ込み大さわぎになり、松平家の農業練習生（当時松平家の農業関係の試験場が城内にあった）が包囲して射殺した」や「石垣を登ろうとしたところを撃ったといわれ、タマは確か腹に当たっていたようだ」など複数人が共通して福井城址で捕殺したとする情報を寄せていた。

剥製化の経緯については、松平侯爵家からの依頼により福井市片町の竹田八郎によって剥製にされたこと、その後は福井高等小学校に寄付されたこと、昭和二〇年七月一九日の福井空襲の際に移管先の第三尋常高等小学校（この時は日出国民学校。現福井市日出小学校）で焼失した可能性が高いこと、シェパードぐらいの大きさで茶がかった色にねずみ色がまじっていたことなどが回想されている。

同紙は一月二三日にも「老人たちの話」として、三人からの情報を載せている。それらを総合すると「鯖江方面から追われて福井市

内にはいり城内で追いつめられたのではないかとみられ」、「逃走の途中、人にかみついている」という。

また出所に関して興味深いのは、「富山県の立山でつかまえたのを、矢野動物園が買った。それが逃げ出したもの」とする情報があった点である。矢野動物園が興行後の移動途中、オオカミが今庄駅で檻を破って逃走、その後鯖江市で幼児を襲い、数日後に福井市内小山谷付近に出現。消防団員に追われたオオカミは城址に逃げ込み、堀に飛び込んで水草にからまったところを射殺されたという。しかし、その一方で「矢野動物園から逃げ出したオオカミと福井に現われたオオカミとは違うオオカミで、逃げ出したオオカミは別の場所で殺されている」との情報も寄せられていた。

この時点では捕殺場所や出所については諸説あって、いまだ定まってはいない。しかし時期については、「明治四十四年ごろ（中略）畑で大麻を刈り取っていた」際にオオカミを見つけたとの証言があったことから、撮影者の野路による明治四十三年説ではなく、四十四年六月説が有力なものとなった。

（四）一九六二年一月、日本哺乳動物学会での鑑定［資料四］

今泉の鑑定によってニホンオオカミ説が確定的になると思われた矢先の同月二三日、『福井新聞（夕刊）』の論調は一変する。見出しには「福井で射殺されたオオカミ　朝鮮オオカミと断定　日本ほ乳動物学会」「日本産より大型　巡回動物園から逃げる?」とある。

一月一九日、国立科学博物館で開催された第六一回日本哺乳動物学会例会には二〇人の会員が出席し、今泉が「明治末年福井で捕獲されたオオカミらしき写真」[5]と題する報告を行った。写真一や新聞記事などが回覧され、形態、年代、捕獲されたときの状況の三点から検討が加えられた。

まず、形態の点では、ニホンオオカミはオオカミの中では最も小さく、足が短い。また吻部（目から前方の突出した部分）も短い特徴を持つ。しかし、写真の個体はチョウセンオオカミの特徴―大型で体長・体高ともに大きく、足・吻部ともに長い―に近いとされた。

つぎに年代の点では、日露戦争後、輸入したチョウセンオオカミをヤマイヌやニホンのオオカミと称して巡回動物園が見せ物に用いた実例が多かったとの指摘がなされた。

さらに捕獲状況は明確ではないが、元来夜行性のオオカミが人間を襲った実例は無いとし、農夫を襲ったオオカミが市街地に逃走した点は野性のオオカミの習性からみて疑問視された。

以上の三点から、写真の動物がオオカミであることは全員の意見が一致したが、「ニホンオオカミではない」と断定され、巡回動物園から逃げ出したチョウセンオオカミ（ヌクテ）であると結論づけられた。このときチョウセンオオカミ説を主張した会員は、早稲田大学の高島春雄（一九〇七～一九六二）や〝オオカミの権威〟斎藤弘吉らであった。

写真一が〝最後のニホンオオカミ〟ではない、との鑑定結果が出たことから、『福井新聞』では続報はなかったようであり、報道は一区切りがつく形となった。しかし、その後は研究者の間で議論が再燃し、ニホンオオカミ説が燻り続けることになる。

二　学問上の論争

ここからは、その後、研究者のあいだで福井オオカミがどのように論じられてきたかを整理する。

（一）一九六五年、直良信夫のニホンオオカミ説

直良信夫（一九〇二～一九八五）は、明石原人の発見で知られる考古学者であるが、『日本産獣類雑話』『日本哺乳動物史』『動物の歴史』を上梓するなど、古生物学的観点に立った動物学の業績も多い。

その直良が昭和四〇年（一九六五）に出版した『日本産狼の研究』（校倉書房）は「第二部　ニホンオオカミの遺体」に「Ⅷ　福井県下のオオカミ」の章を立てて「明治末年に福井城址内で射殺されたオオカミ」を取り上げている。

直良も昭和三七年の学会に出席していたが、この時初めて写真一を見ており、「帰途いろいろ考えた末、平岩・故斉藤両氏らの推考に、若干疑問をもつに至った」という（平岩は後述する平岩米吉、斉藤は前述の斎藤弘吉）。そのため福井新聞社から写真を取り寄せ、写真からの種分けは難しいと断ったうえで、以下のような判定を行っている。

まず、背景に写る礫の大きさから、オオカミは直径五センチ前後ほどの太めの前肢を持ち、全長は約五〇センチであることを算出した。これは四肢が細くやや短い特徴を持つニホンオオカミの特徴と比べると、体は大きく、四肢も長大に映る。この点については、算出法が仮定的なものであり、写真撮影時の角度がそのように見せているのだと説明する。

またニホンオオカミは「顔面長が短い」すなわち吻部が短いとの通説に基づき、「頭蓋全長／顔面長」の比率を算出した。写真一のオオカミの指数は一・九であり、同じく明治四一年（一九〇八）に和歌山県大台ヶ原山麓大杉谷で捕獲されたとされるオオカミの写真の指数も二・〇と近似の数値を示すという。これに対し「チョウセンオオカミは、その指数が約2・5となる」ことから、「福井産は、チョウセンオオカミというよりは、むしろニホンオオカミと推考するのが、妥当のようである」と結論づけた。

あわせて不確実な「逃走説」がもとになって、チョウセンオオカミ説が生まれたのではないかと疑問を呈し、「逃走説のあるなしにかかわらず、動物体そのものの姿態から、種類を判定するようにつとむべきであろう」としてニホンオオカミ説を支持している。

（二）一九六九年、今泉吉典の再度のニホンオオカミ説

直良のニホンオオカミ説をふまえ、今泉もまた昭和四四年（一九六九）、『科学朝日』二九巻七号に寄稿した記事「ナゾに包まれるニホンオオカミ―新しい視野でこの〝珍獣〟の追及を」において、改めてニホンオオカミ説を提示した。

まず、今泉は現存する頭骨標本の比較から、ニホンオオカミは「顔面部のプロフィルが、ほとんど直線で、大陸のオオカミのように中くぼみでないこと、涙骨と骨口蓋後縁（こつこうがいこうえん）の形態が異ること、さらに最も重要なのは、側頭窩下部にある孔が一

個多く合計六個あること」から、大陸のオオカミの亜種ではなく、別種であるとの仮説を示す。

そのうえで福井オオカミの写真を「ほ乳動物学会例会で討議した当時（一九六二年）、私はまだニホンオオカミをよく知らなかった。そのため、何とも判断しかねた」と回想し、改めて写真一を見ると「耳の小さいところ、体毛（夏毛）が短く全身一様なところ、四足写真では特に後足の短いところ、顔面部のプロフィルが直線で、中くぼみでないところなどが、大陸系のオオカミとは違っていて、ニホンオオカミの特徴に一致する」と鑑定した。

さらに「巡回動物園から逃げだしたものではあるが、立山で捕えられたものだという古老の談話が正しいのではないだろうか」として、脱走説も併せて支持している。

なお、今泉は翌四五年に「ニホンオオカミの系統的地位について1　ニホンオオカミの標本」「同2　イヌ属内での頭骨における類似関係」（『哺乳動物学会雑誌』五巻一号、同二号）において、ニホンオオカミを独立種とすべきとの見解を改めて示している。[6]

（三）一九七四年、平岩米吉のチョウセンオオカミ説

先の直良によるニホンオオカミ説を真っ向から批判したのが、平岩米吉（一八九八～一九八六）である。在野の動物学者である平岩は、昭和三年（一九二八）に日本犬保存会の設立に参画、同五年には自邸・白日荘に犬科生態研究所を設立し、生涯にわたってシェパードなど六〇頭以上の犬を飼育するなかで特にイヌ科の生態を研究してきた。また、昭和五～一七年に九頭のオオカミを飼育し（朝鮮産六頭、満州産一頭、蒙古産二頭）、昭和五六年には『狼―その生態と歴史』（動物文学会）を刊行することになる。

前述のとおり、平岩もまた前掲の学会に出席しており、その折にも写真判定によってチョウセンオオカミ説を主張していた。その後、直良のニホンオオカミ説提示を受け、昭和四九年、『アニマ』二巻一〇号（平凡社）に発表した論考「ニホンオオカミはもういない―その残存説六十六年の記録」のなかで、主に「頭蓋全長／顔面長」の指数の点から直良説を厳しく批判した。[7]

まず前提として「指数が、少なければ、それは吻部の長いことを意味し、反対に指数が多ければ、吻部の短いことを意味する」ことを再確認する。つまり吻部が短いとされるニホンオオカミは指数が大きくなるはずである。

そのうえで直良が同書に示したニホンオオカミの頭骨四例の精密な計測表から、それらの指数が二・二九～二・四八であることを計上した。また、平岩自身が所蔵するニホンオオカミの頭骨では指数が二・四八であり、同じくチョウセンオオカミではオス二・一四、メス二・〇〇、また満州産ではオス二・二八、メス二・二二になるという。つまり、写真から計測された福井オオカミの指数一・九はかなり小さいもので、吻部が長いことを意味することは明らかである。したがって骨格を専門とするはずの直良が「うっかり思い違いして逆にとったのではなかろうか」とし、福井オオカミが「はっきり日本狼ではなくなる」と断じたのである。

なお、同論考は明治四一～昭和四八年（一九〇八～七三）におけ

るニホンオオカミ残存に関する二七例の記録を検討したものであり、福井や大杉谷の例を含むこれらのなかには「日本狼が生存していたという確実な証拠は一つもない」との結論に達している。

その後、直良からの直接的な反論はなかったものとみえ、同論考が「その後の残存説―残存説七十年の記録」と改題・再編のうえ、著作『狼―その生態と歴史』に再録された際にも論旨に大きな変更は加えられていない。[8]

(四) 二〇〇三年、吉行瑞子・今泉吉典のニホンオオカミ説

平成一五年（二〇〇三）九月、吉行瑞子と今泉吉典の共著で発表された論文「福井城内で射殺されたニホンオオカミ」（『ＡＮＩＭＡＴＥ』№4）は、それまで通説的な位置を占めてきていたチョウセンオオカミ説を覆す内容となった。

掲載誌の発行元・農大動物研究会は、東京農業大学一般教養動物学研究室ＯＢが中心となって平成六年に発足したものであり、機関誌『ＡＮＩＭＡＴＥ』は広く流通する性質の媒体ではなかった。それでも翌年二月に共同通信や『読売新聞』が記事にしたことから、本論文は一般の注目を集めることとなる。

第一著者の吉行瑞子（一九三二～）は国立科学博物館動物研究部を経て、平成四～一四年に東京農業大学教授（初め短期大学部）を務めた動物学者で、今泉とは師弟関係にあたる。[9] 専門は分類学的研究であり、昭和五九年（一九八四）に「日本産翼手類の分類学的研究」で九州大学から農学博士号を授与されている。

本稿の執筆契機となったのは、今泉が国松俊英『鳥を描き続けた男―鳥類画家 小林重三』（晶文社、一九九六年）のなかに福井オオカミに関する記述を見つけたことであった。同書は友永冨「松平試農場誌」を引いており、それまでの『福井新聞』が報じていない情報にも言及していた。「松平試農場誌（二）」（『福井の農業』一九巻二一七号、一九六七年）**［資料五］**を取り寄せた吉行は、目を通した瞬間に「やはり、あれは動物園の脱走オオカミなんかじゃない。ニホンオオカミだったんだ」と確信したという。[10]

「松平試農場誌」の著者・友永冨は農学博士で当時は福井県農業試験場長であり、掲載誌『福井の農業』は福井県改良普及職員協議会の機関誌である。同記事は、明治二六年（一八九三）に侯爵松平康荘が福井城址に創設した松平試農場の歴史をたどったもので、全三回連載の二回目に福井オオカミへの言及がみられる。

この連載記事で特筆すべきは、捕殺した三人と並んで撮影されたオオカミの写真が初めて公表されたこと**［写真二］**、また捕殺日時が明治四十三年八月三日の夕方、場所が試農場寄宿舎付近であったことが特定され、銃で射止めた後に棍棒で撲殺したことなど詳しい経緯が紹介されたことである。さらに捕殺翌日の朝に「福井中学動物学教諭羽金準一郎」により、このオオカミが「純粋の日本オオカミであるが矢野動物園館のものかどうかは不明」との鑑定が下されたこと、また同日午後には「矢野動物館員の松尾嘉蔵が来福」して「同館所有オオカミでない」との調査結果を明らかにしたことも他では取り上げられたことのない情報だった。「当時このニュースは「オオカミ城内を荒らす」と題し大々的に扱われた」とも記され、当時

写真二　松平文庫（福井県文書館保管）

の新聞記事などをもとに書かれたものと推測されるが、現時点では典拠資料を明らかにすることはできない。

吉行と今泉はこの「松平試農場誌」の入手後に「明治43年松平試農場雑日記」の写真も入手しており、福井オオカミの体重が五貫目（一八・七五kg）であったことも知ることになる[11]（後述）。

これらの情報をふまえて「1961年（昭和三十七年）の哺乳動物学会において、このような状況が明らかであれば、結論は異なっていたことだろう」と前置きしたうえで、福井オオカミが「体重が示すように小型、前後肢が頭胴長に比べて相対的に短く、尾はかかとに達し、尾端部は先細を呈しない」ことは「ニホンオオカミ的に固有の重要な特徴」とし、「吻が細く且つ長い傾向」は「ニホンオオカミの特徴をよく示している」と評した。

吉行・今泉論文に対するその後の反響を記したものに、平成一九年一月七日、宮武努記者による『朝日新聞（福井版）』特集連載記事「福井の宝探訪記6　最後のニホンオオカミ」がある。これによれば、二人の元には「特に反論は寄せられなかったが、積極的な支持や定説修正を求める声があがることもなかった」といい、記事は「この論文も定説を書き換えるには至っていない」と結論付けている。また、レッドデータブックの執筆を担当した石井信夫（東京女子大学教授）による「この分野で決め手になるのは標本の有無」とのコメントを載せ、焼失した剥製が「「絶対」の証拠」になるはずだったことが強調された。あわせて記事には「明治四十三年八月採集純日本種狼」「福井市竹田教育用器械製造所製」と記された福井オオカミの剥製写真も掲載されている[12]**［写真三］**。

写真三　福井市立郷土歴史博物館蔵

三　矢野巡回動物園とオオカミ

福井オオカミをニホンオオカミとみるか、チョウセンオオカミとみるか、その判断の重要なカギとなるのは、飼育するオオカミを脱走させてしまった矢野巡回動物園の存在であろう。

「松平試農場誌」は脱走の経緯を次のように詳述している。まず、七月三〇日福井県小浜町（現小浜市）で興行していた「矢野動物館」が汽車で石川県小松町（現小松市）に向かう途中「満州産と称する灰色のオオカミ」が今庄村（現南越前町）と鯖江町（現鯖江市）の間で逃亡する事件が起きた。その後、舟津村小黒町、同村有定（ともに現鯖江市）や社村小山谷（現福井市）で子どもがオオカミに咬まれる騒動が起こる（日付不詳）。そのため捕殺翌日の八月四日午後に「矢野動物館員の松尾嘉蔵」が福井に来て調査をした結果、「同館所有オオカミでない」ことが明らかになったという。

約二〇kmの距離がある今庄鯖江間のどの地点で脱走したかは明らかではないが、子どもが咬まれたとされる舟津村辺から小山谷までは約一〇kmの距離にあり、オオカミが数日かけて移動するには十分な距離であった。したがって、普通に考えれば、今庄鯖江間で脱走したオオカミ―舟津村で子どもを咬んだオオカミ―小山谷で子どもを咬んだオオカミ―福井城址で捕殺されたオオカミの四例はいずれも一個体とみるのが自然であろう。しかし、後述するように咬まれた幼児が死亡したとの報道も見られ、責任や補償の問題もあることから、矢野動物園としては自身の所有していたオオカミと認めることはできなかったのだろう。

では矢野動物園とも矢野動物館とも記されるこの団体はいかなる存在だったのだろうか。これを扱った研究は、阿久根巌『サーカス誕生―曲馬團物語』（ありな書房、一九八八年）が唯一のものである。同書「第四章 矢野巡回動物園」ではその成立から解散までの経緯が豊富な資料をもとに叙述されており、「最後の日本狼」の節が立てられ、福井オオカミについても言及されている。以下特に断らない限り、同書の成果に依拠して記述を進める。

矢野巡回動物園は、香川県出身の矢野岩太（一八六五～一九二六）が日清戦争の頃（一八九四～九五）に動物見世物を始めたことに遡る。はじめ山猫一匹の見世物だったものが、明治四〇年（一九〇七）にドイツのハーゲンベック動物園から二頭のライオンを購入し、広島で本格的な巡回動物園が始動する。当時の新聞には次のような広告が載った（『中国新聞』明治四〇年一一月一四日）。

万国動物園

十月廿五日上海電報東京各新聞記載独逸ヨリ送付八呎ノ大獅子二頭着ニ付外ニ大虎大狼大々蛇駝鳥其他数十種ノ珍ラシキ生キ物ヲ集メ堀川町勧商場ニ於テ仮動物園開会参考ノ資ニ供セント欲ス志学ノ諸君士陸続御来観ノ栄ヲ賜ハランコトヲ伏シテ乞フ

十一月十四日ヨリ毎日午前九時開会午後十一時閉会

教員引率団体学生ニ限リ半額

園主矢野　敬白　（傍点引用者）

「数十種ノ珍ラシキ生キ物」に含まれる「大狼」は「土佐産の狼」

長野　一九一〇年の「純日本種狼」

と説明されており（『中国新聞』一一月一六日）、同四三年三月の九州沖縄八県連合共進会でも「内地産の狼」すなわちニホンオオカミとして展示されていた（『九州日報』三月二一日）。もしこれが正しい情報であるならば、捕殺された福井オオカミもニホンオオカミだった可能性が極めて高いことになる。

しかし、同園の説明、宣伝には怪しい点も頗る多かった。オスのライオン親子をオス・メスと偽って公開したり、明治四一年にはこのライオンを「丁抹（デンマーク）王御自愛之大獅子」と宣伝したりした。また、翌四二年には同じくハーゲンベック動物園から購入したとおぼしき大山猫を、日露戦争時の著名な敗将アレクセイ・クロパトキンにあやかって「黒鳩公愛育の山猫」と称し、シベリア産の虎までも「黒鳩公将軍が愛育したもの」として宣伝するなど、同園は「本当のような大嘘で、観客を煙に巻く手腕」を発揮したという。

このような同園の「手腕」は、動物学者によっても記録されていた。広島文理科大学（現広島大学）教授の阿部余四男（一八九一～一九六〇）は、著書『動物学参考』（三省堂、一九三五年）のなかで「巡廻動物園でよく日本の『やまいぬ』と云つて見せるのは朝鮮の「ヌクテー」である」と述べており、「やまいぬ」すなわちニホンオオカミと称して巡回していたものはチョウセンオオカミであったと断じている。また阿部は『動物閑談』（三省堂、一九四二年）所収「ヤマイヌのはなし」においても「剥製で確実に本土のヤマイヌと称せられるものは僅かに一個だけで、福島県産として上野帝室博物館天産部にあつたのを十数年前に観たことがあつたが耳がかなり大きかつたのを不思議に思つた記憶がある。他の博物館ではヌクテー然たるものをヤマイヌとしてをられたのもあつた。ヌクテーは今でも沢山棲息して居るので巡回動物園などから標本屋にまはつてヤマイヌのレツテルをはられたこともあるのであらう」と述べている。

つまり矢野巡回動物園による「土佐産の狼」「内地産の狼」との説明はそのまま鵜呑みにはできないことになる。その一方で「松平試農場誌」によれば福井オオカミは「満州産と称する灰色のオオカミ」と述べられ、また阿久根によって紹介された福井オオカミ脱走を伝える『芸備日日新聞』の記事【資料六】でも「灰色の狼一頭（矢野は之を満洲産と称せしも日本産狼なる由）」と記されていた（明

上：写真四　下：写真五　筆者蔵

治四三年八月七日）。おそらく同一個体を時と場に応じて国内産としたり、国外産（満州産）と称したりしていたようである。

なお、脱走オオカミと同一個体かどうかは不明であるが、矢野動物園が発行したオオカミの絵葉書二種、明治四〇年頃の「東洋無比矢野動物園狼」**[写真四]**と明治四〇～大正七年頃の「独逸特約東洋無比矢野動物園ヲ、カミ狼」**[写真五]**を参考までに掲げておく。[13]

四　鑑定の経緯

では、矢野巡回動物園のオオカミの産地が明らかにできないにもかかわらず、なぜ写真三には「純日本種狼」と記されたのか。

当時、福井オオカミ出没のニュースは、広島県の『芸備日日新聞』や石川県の『北國新聞』でも報じられた**[資料七]**。また「松平試農場誌」が「当時このニュースは「オオカミ城内を荒らす」と題し大々的に扱われた」と述べるように、福井県内の新聞でも大きく取り上げられたようである。この時期、県内では『福井新聞』『福井北日本新聞』『敦賀新聞』『みくに新聞』『若州新聞』『北陽新聞』などが刊行されていたが、捕殺前後にあたる明治四三年八月一日～一〇日の号が一号も現存していない。それでも今回新たに紹介する『東京朝日新聞』の八月六日の記事は、確認できる限りでは最も詳細な内容を持つ。そこでその概要を時系列にまとめて以下に示す**[資料八]**。

・七月三〇日夜、小浜での興行を終えた矢野巡回動物園がオオカミを檻に入れ、敦賀から汽車で輸送。その後、汽車が福井駅に到着した時点で、今庄鯖江間で「満州産と称する灰色の狼一頭」が逃走したことが露見して大騒動となる。

・同三一日、「狼に似たる一頭の怪獣」が舟津村小黒で幼児を咬み殺し、同村有定と神明村水落でも幼児に咬み付き、長泉寺山（現鯖江市）に逃げ込む。鯖江警察署は、これを狂犬と判断し、非番巡査と猟師数名を派遣し、四、五頭の犬を殺したが「最も大なる灰色の一頭」は逃走。

・八月一日、「灰色の怪物」が福井市近郊の社村小山谷で小児に噛みついたとの報せを受けた福井警察署は、これを動物園から脱走したオオカミとみなして各署に通報。

・同三日朝、「件の怪物」が福井市佐佳枝下町（現福井市順化一丁目）に現れ、旧福井城址の堀を渡って松平侯爵邸に入り、表門から出て、同家家扶児島宅を通り抜け、松平試農場のあった本丸に侵入。松平家では試農場の農夫と講習生約三〇名を繰り出して捜索させたが見つけられず、午後五時に一旦捜索を中止。しかし、農場助手ら三名が、この「怪物」の姿を確認し、午後七時頃、棍棒でこれを撲殺。

・同四日朝、「福井中学動物学教授」が「全く日本産の狼にして可なり年を経たる雌狼にて而も未だ分娩したることなく且歯牙等の完全なるより見れば多分人に飼養せられしものならん」と鑑定。

以上の記事内容からは、八月四日に鑑定にあたった「福井中学動物学教授」の存在とその鑑定内容が特に注目される。この「動物学教授」が、前掲「松平試農場誌」で「純粋の日本オオカミであるが矢野動物園館のものかどうかは不明」との鑑定を下した羽金準一郎

であることは間違いないだろう。『東京朝日新聞』に掲載された鑑定結果は、単に「全く日本産の狼」とするのみならず、年経た未分娩のメスで野生のものではない、とする詳細な内容を持つものであった。そこで次に問題となるのは羽金の鑑定能力である。それを推量するため、羽金の経歴をたどってみたい。[14]

羽金準一郎は明治一四年に栃木県下都賀郡（現栃木市）に生まれた。同三四年三月に栃木県立栃木中学校（現栃木高等学校）を卒業後、[15]翌三五年に東京帝国大学附設の第一臨時教員養成所博物科に入学、同三七年三月に同所を卒業して中学校博物科教諭の資格を取得している。[16]同年四月には栃木県立佐野中学校（現佐野高等学校）で教職に就き、この年一二月一日には陸軍に志願入隊して東京湾要塞砲兵聯隊第三中隊に所属した。[17]翌三八年一二月一日に予備役になると、翌三九年には教育現場に復帰し、栃木県立宇都宮中学校（現宇都宮高等学校）に赴任。同校には同四二年五月一日までは在籍していた（この間、同四〇年に陸軍砲兵少尉に任官）。

福井県立福井中学校（現藤島高等学校）への転任は明治四二年五月五日頃[18]のことで、大正四年（一九一五）までの約七年間を福井で過ごした。したがって福井オオカミの鑑定を依頼されたのは、福井赴任の翌年、二九歳の時のことである。なお、福井への転任は、同校で博物教諭をしていた森為三（一八八四～一九六二）が官立漢城高等学校（現京畿高等学校）の教授として大韓帝国に招聘されたことによる後任人事である（森はのち京城帝国大学予科教授）。[19]森と羽金が教員養成所の同期生であった縁故によるものだろう。

福井を離れてからは、大正五～八年に静岡県立掛川中学校（現掛川西高等学校）、同九～昭和五年の山口県立宇部中学校（現宇部高等学校）[20]での在籍を確認できるが、その後はたどることができない。

この時期、博物の教科では「重要ナル植物、動物、鉱物ニ関スル一般ノ智識並ニ人体ノ構造、生理及衛生ノ大要」（明治三四年三月「中学校令施行規則」第八条）が教えられていた。羽金は明治三七年五月、二三歳の時点で東京動物学会の会員であったことから、[21]動物学を専門にしていたものと思われる。このことは現在、東北大学総合学術博物館に、宇部中学校在籍時に羽金が山口県内で採集した二枚貝類の古生物標本が収蔵されることからも裏付けられる。[22]

以上が二三～四九歳まで中学校教員を務めた羽金準一郎の経歴である。当時、中学校教員の資格（中等教員免許）を取得する方法の一つに「指定学校」卒業者による「無試験検定」制度があった。例えば、東京帝国大学理科大学（現東京大学大学院理学系研究科・理学部）動物学科を卒業して理学士となった者には中等教員免許が与えられた。しかし羽金が卒業したのは、東京帝国大学附設の臨時教員養成所であり、あくまで博物科の教員になるためのものであった。したがって羽金を「動物学教授」（『東京朝日新聞』）や「動物学教諭」（「松平試農場誌」）と呼ぶことは正しくない。

また、羽金は早くから動物学会には属していたものの、同誌に哺乳類に関する論文等を発表した形跡も認められない。明治三八年、鷲家口で最後のニホンオオカミが捕獲された時点でニホンオオカミの出現事例はきわめて稀であったことをふまえると、明治四三年、

二九歳の羽金がそれ以前に生きた個体を実見した経験はおそらく無かったであろう。雌雄の別や分娩経験の有無を確認することはできても、それを「全く日本産の狼」と鑑定できるだけの十分な知見は持ち合わせていなかったとみるのが自然ではないだろうか。

五　まとめにかえて

最後に吉行・今泉論文が参照した松平試農場の「雑日記 明治四十三年」（松平文庫・福井県文書館保管）**［資料九］**を検討してまとめにかえたい。

越前松平家第一八代当主の康荘は、英国サイレンセスター王立農学校の留学を経て、明治二六年（一八九三）、旧福井城の本丸・二の丸・三の丸に松平試農場を創設した。同三九年に園芸伝習所が併設され、同四二年には耕地面積が四町六反二畝二八歩（一三、八八八坪）に及んだ。その約七五％が果樹園であり、耕地にはりんごや桃、梨、柿など多くの果樹が植えられていた。[23]

試農場では試験研究成果や農産物の売払原簿、園芸伝習所の教務日誌など多くの帳簿が作成されていたが、当該の「雑日記」は試農場でのできごとを日々記したものである。その明治四三年八月四日条に、前日三日のできごととして福井オオカミ事件の顛末が「狼捕殺」と題して詳述されている。以下にその概要を示す。

八月三日、福井城内に野犬が入り込んだとの報せを受け、試農場の職員や研究生が総出で捜索したが発見できなかった。ところが夕方になって寄宿舎付近（東三の丸。現福井市大手一丁目付近）に現れたため、佐竹・奥谷両助手および稲垣研究生の三名でこれを包囲し、ほか一、二名が手伝った。その後、奥谷が銃で射止め、佐竹と稲垣が打ち撲り、ついに捕殺することができた。

野犬との報せだったが、仕留めてみると「巨大ナル豺」で、体重は五貫目あった。数日前に鯖江方面で小児数名を傷つけたものが、試農場まで逃げてきたものらしい。翌四日には松平邸で捕殺個体の写真を撮影した。賞与として、奥谷助手には柳行李一組と園芸調査書一冊、佐竹助手と稲垣研究生には柳行李一組が試農場から与えられ、松平家からも御賞賜があった。[24]

以上が一次資料「雑日記」から判明する事実である。ここでは捕殺個体について、試農場が「巨大ナル豺」と認知していた点に注目したい。「豺（やまいぬ）」の語には、ニホンオオカミの異名の意味と野生化して山に棲息する犬の意味の二つがあるが、記事冒頭に「狼捕殺」との題があることからもわかるように、ここでは前者の意味で使用されたものである。「雑日記」や試農場関係資料の中には福井中学校の羽金準一郎や矢野巡回動物園の松尾嘉蔵による鑑定の経緯を書き留めたものを確認することはできない。しかし、松平家が竹田教育用器械製造所に作らせたとされる剥製の写真三には「純日本種狼」との記載があり、松平家および試農場では、これをニホンオオカミと認知していたようである。

また、写真三が貼られた貼交帖には次の書き込みが見られる。

興業主ノ狼逸走シ、福井市内ニ徘徊シ、之ヲ捕獲セントシタル

長野　一九一〇年の「純日本種狼」

モ容易ニ獲ルコト能ハサリシガ、不図松平城内ニ入リタルヲ見付ケ辛フシテ撲殺シタルナリ

「雑日記」も「数日前鯖江ニテ小児数名ヲ傷ケタルモノ、逃レテ茲ニ至レルモノナリ」と記し、『東京朝日新聞』も「全く矢野動物館の狼に相違なからん」と記事を締め括っていることからみて、松尾が否定したにもかかわらず、やはり一般には矢野のオオカミと福井オオカミは同一のものと認識されていたのである。

そして矢野巡回動物園で「満州産」と称して興行されたにもかかわらず、それが「純日本種狼」とみなされたのは、羽金の鑑定によるところが大きい。その後、剥製の寄贈先である福井高等小学校や同校廃止後にそれを引き継いだ福井第三尋常高等小学校（のちに福井市日出国民学校と改称）では、この剥製はニホンオオカミとして数十年にわたって児童の教育に用いられたものと推測される。

昭和二〇年（一九四五）七月一九日、福井空襲により福井市日出国民学校は全校舎が焼失し、この剥製も焼失したとみられている。したがって現時点では、種の特定につながる「「絶対」の証拠」は完全に失われてしまった。[25] しかし、福井オオカミをチョウセンオオカミと断定した昭和三七年段階では検討されることのなかった写真や資料もその後になっていくつも確認されている。写真二から推定される体長や「雑日記」に記された体重、『東京朝日新聞』に記された性別、そのほか毛の色や捕殺の季節、「満州産」と称して興行されていた点などは、総合的な判断を行う上での重要な材料となるだろう。またこの先、明治四三年八月一日～一〇日の地元紙が見つかれば、さらに新たな情報が加わるはずである。その発見の日を待つことにして本稿を閉じたい。

註

（1）鷲家口で捕殺個体を最後のニホンオオカミとみる説がいつ頃から定着したかは不明であるが、昭和一四年（一九三九）一月九日『東京朝日新聞』では「この狼が日本狼の最後の生存記録」と記されている。

（2）西村英之「野路定吉氏旧蔵 明治初年の写真帳について」（『福井市立郷土歴史博物館研究紀要』七号、一九九九年）。

（3）同紙の一連の記事は小林巌記者による（小林巌『評論 福井の文化』フェニックス出版、一九八〇年、一四一～一四二頁）。

（4）吉行瑞子「今泉吉典先生ご他界（故今泉吉典先生追悼文）」（『哺乳類科学』四七巻二号、二〇〇七年）、同「日本動物分類学会と今泉吉典博士」（『タクサ 日本動物分類学会誌』二四巻、二〇〇八年）。

（5）報告の題目は「明治末福井で捕獲されたオオカミらしき動物の写真の鑑定」だったともいう（吉行瑞子・今泉吉典「福井城内で射殺されたニホンオオカミ」『ＡＮＩＭＡＴＥ』№4、二〇〇三年）。

（6）二〇〇九年には、石黒直隆らが骨標本から分離したミトコンドリアＤＮＡを系統解析した結果、ニホンオオカミがタイリクオオカミの一亜種であるとの説が改めて提示されている（Ishiguro N, Inoshima Y, Shigehara N : Mitochondrial DNA analysis of the Japanese wolf (Canis lupus hodophilax Temminck, 1839) and comparison with representative wolf and domestic dog haplotypes. Zool Sci, 26, 765-770 (2009)）。

（7）平岩は後に頭骨による鑑定法について、「日本狼と朝鮮狼の頭骨鑑別」（『動物文学』四五巻一号、一九七九年）を発表している。

（8）「表4　各地のおもな『狼』事件と、その正体」では、福井の事例が、発生年月「1911・6」、発生場所「福井武生市」とされているが、後述のとおり「1910・8・3」「福井福井市」が正しい。

（9）吉行の経歴は、日本哺乳類学会ウェブサイトによる（https://www.mammalogy.jp/prize/2011.html）。＊二〇二二年四月一日閲覧（以下、ウェブサイトの閲覧日はすべて同日）

（10）『朝日新聞（福井版）』平成一九年一月七日の記事「福井の宝探訪記6　最後のニホンオオカミ」（後述）。なお、今泉は共著論文の発表以前にも、福井オオカミを「ニホンオオカミに間違いないと思う」と『福井新聞』の取材にこたえていた（平成一一年一一月二四日の記事「ふくい探検隊　絶滅したニホンオオカミ　最後の一頭は『福井』!」）。今泉は平成一〇年に国松の著書から「試農場史（ママ）」の存在を知り、「サーカス（ママ）館員や福井中教諭の証言を重視」するに至ったという。

（11）論文末尾の謝辞には「松平試農場の雑日記（一九一〇）の入手は八木博様のお骨折りによります」とあり、秩父宮記念三峰山博物館客員研究員の八木博（一九四九～）の協力があったことが示されている。また、宗像充『ニホンオオカミは消えたか?』（旬報社、二〇一七年）では「こういった資料を実際に福井まで足を運んで発掘したのは八木である」とするが、旬報社ウェブサイト掲載の正誤表では「こういった資料を発掘したのは八木の活動について紹介した一九九九年のテレビ番組、「幻のニホンオオカミを追い続ける男」のディレクター田中重幸氏である。八木が吉行たちへの資料の橋渡しをした」と訂正されている（https://www.junposha.com/book/b317252.html）。

（12）写真三は、平成一六年（二〇〇四）刊『福井市立郷土歴史博物館友の会DAYORI』第弐号の表紙にも掲載されていた。しかし、その解説には「明治43年（一九一〇）八月七日、松平試農場で捕殺された日本オオカミ」とあり、日付に誤りがある（正しくは三日）。また『福井新聞』同一七年四月一三日の記事「ニホンオオカミはく製を公開　市自然史博で特別展」でも写真三が掲載され、福井オオカミ事件の概要や、剥製の行方、吉行・今泉論文について簡略に言及されている。

（13）筆者は宛名面の様式から年代を比定したが、阿久根『サーカス誕生』は、写真四を「撲殺された狼（明治四三年）事件の頃の矢野動物館絵葉書の狼」、写真五を「土佐産と称し英田（『芸備日日新聞』大正二年五月二八日）狼と同じ写真の矢野動物園絵葉書」として掲載している。

（14）教員・軍人としての経歴調査は『職員録』（内閣印刷局）、『中等教育諸学校職員録』（中等教科書協会）および『陸軍予備役後備役将校同相当官服役停年名簿　明治四五年七月一日調』（川流堂）を用いた。

（15）熱田熊蔵編『同窓会報』（栃木県立栃木中学校同窓会、一九二七年）。

（16）「官報」第五六四三号（明治三五年四月三〇日）、第六二一七号（明治三七年三月二六日）。

（17）『動物学雑誌』一九五号、一九〇五年。

（18）『福井新聞』明治四二年五月五日「教諭の新任　栃木県宇都宮中学校教諭羽金準一郎氏は今回本件福井中学校教諭に任ぜられ七級俸給与せらる」。

（19）相坂耕作「森為三博士の御経歴」（『兵庫生物』一四巻二号、二〇一一年）。

(20) 昭和五年は宇部市立宇部農業実践学校（現山口県立宇部西高等学校）の博物教諭も兼務していた（『中等教育諸学校職員録 昭和五年五月現在』）。

(21) 同会刊『動物学雑誌』一八七号（明治三七五月一五日）に「会員の就職…羽金準一郎君は佐野中学校（栃木）」「四月中会員の転居左の如し…栃木県佐野中学校　羽金準一郎」と見え、これ以前に会員だったことがわかる。

(22) 東北大学総合学術博物館「古生物標本（ＩＧＰＳ）データベース」（http://tohoku-u.jpaleodb.org/IGPS/search.php）。

(23) 試農場の歴史は、小林健壽郎編著『松平試農場史』（越前松平家、一九九三年）を参照。なお、同書第二編第三章第五節は「オオカミ退治と森田農園」と題し、写真二を掲載して事件の概略を載せている。

(24) 「家譜　康荘公」明治四三年八月四日条（越葵文庫・福井市立郷土歴史博物館保管）［資料一〇］。なお、試農場「研修生名簿」（松平文庫）からは、捕殺者の正確な名前と明治四三年八月時点の年齢が、奥谷奥之助（満二一歳）・佐竹政治（満二一歳）・稲垣正男（満二〇歳）であることがわかる。

(25) 捕殺後の福井オオカミを実見した三田村保正は「旧士族の人がお守りにしたいから毛をほしいとか、肉を食べたいからわけてほしいとか次々に申し込んできた」と回想している（資料一二）。この毛が伝存していれば、ＤＮＡ解析の試料に使える可能性はあるだろうか。なお、三田村は自身の著作『福井風物「明治大正」』（私家版、一九八三年）でも「狼さわぎ」と題した短文と絵を載せ、福井オオカミの形態について「コゲ茶色の毛、口は大きく裂けていた」「今のセパート犬ほどの身体」と記している。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、平成以降『福井新聞』で福井オオカミに関する多くの記事を担当してきた伊与登志雄氏から多くの御協力・御教示を頂いた。また、『東京日日新聞』『毎日新聞』の調査では毎日新聞社の岩間理紀氏の御協力を得、栃木中学校『同窓会報』の存在については栃木県立図書館調査相談課、『朝日新聞』明治四三年八月六日の記事については福井県立図書館の前田眞佐子氏より御教示を得た。この場を借りて感謝申し上げたい。

資料

資料一　『福井新聞』昭和三七年一月一日（抄）

科学博物館今泉吉典氏の話　野犬ではなくニホンオオカミだと思います。オオカミの死体の写真は非常に珍しいもので、確実と思われるものはこれが唯一かもしれません。一九〇五年（明治三十八年）に最後のオオカミが捕獲されたのですから、明治四十四、五年となれば大変重大なことで驚きました。哺乳動物学会に写真とともに報告して多数の方のご意見を聞いてみたい。

撮影した野路定吉さんの話　五十年も前のことだからはっきり覚えていないが、明治四十三年ごろではなかったかと思う。それ以前にオオカミが出たということは聞いたことはなかった。色は灰色で犬よりも大型で、首すじの毛が長かった。

福井市歴史館谷口主事の話　五十年前は福井城内はジャングルみたいな所もあり、オオカミが出たとしても不思議ではない。私も問題のオオカミを見たが、明治四十三年以降のことであったと確信を持っていえる。当時大

さわぎになり話題を呼んだと記憶している。

資料二『福井新聞（夕刊）』昭和三七年一月一七日（抄）

石垣へのぼるところを射殺　福井市東日之出町二丁目三田村保正氏（六三）＝県刀剣審査員＝からの知らせによると、同氏もオオカミの死体をみており、当時福井市片町の竹田八郎氏宅に運ばれ同氏の手ではく製にされたという。この竹田八郎氏は現在同市大和中町で教育用品の製造販売をしている竹田正三氏の先代で、八郎氏夫人の久乃さん（七四）の話によると、当時松平家から依頼されてはく製にした。旧士族の人がお守りにしたいから毛をほしいとか、肉を食べたいからわけてほしいとか次々に申し込んできたという。オオカミの出現は市中の人を驚かせ大さわぎとなったが、オオカミがお堀に飛び込み石垣をよじ登ろうと足をかけたところを射殺したという。はく製は標本として学校へ寄付された。竹田家にはオオカミの大きな写真も保存されていたが今はない。

セパードぐらいの大きさ　どこの学校に保存されたかについては、福井市春山中町青木勢太郎氏（六一）の話によると、福井高等小学校（当時村田千熊校長、現繊協ビル付近にあった）へ寄付された。当時同校の教員であった芳谷為次氏（七一）＝福井市寿町＝の話では確かに福井高等小学校にあり、同校は昭和三年に廃止となり備品一切は新しく建設された第三尋常高等小学校（通称第三校）へ譲り渡したが戦災で焼けたのではないかという。同校の後身は福井市日出小学校だが、同校の戦後の古い備品簿にもオオカミの標本は記載されていないところから、戦災かそれ以前になくなったとみられる。当時の事情について芳谷氏は「そういえば確かに標本があったが、オオカミが出たころの事情は忘れてしまった」といっている。さきに三田村氏の記憶では「普通のセパードぐらいの大きさで茶がかった色にネズミ色がまじっていた。石垣を登ろうとしたところを撃ったといわれ、タマは確か腹に当たっていたようだ」と話している。

松平家屋敷に逃げ込み大騒ぎ　青木勢太郎氏の話では、オオカミは片町に現われ浜町方面へ逃げ足羽河原で消防団員が殺したという。しかし勝山市鹿谷町の一読者からのはがきによると、福井城内の松平家屋敷に逃げ込み大さわぎになり、松平家の農業練習生（当時松平家の農業関係の試験場が城内にあった）が包囲して射殺したものという。これは三田村氏、オオカミの写真をとった野路定吉氏（八四）＝武生市村国町＝らの記憶と同じ。福井市郷土博物館の谷口初意氏も足羽河原ではなく福井城内に間違いないといい、青木氏の記憶とは食い違うが、青木氏の記憶は相当に具体的であることから考えて真実がどれかは不明。

オオカミの出所はわからず　またオオカミの現われた時期については谷口氏は明治四十四年か四十五年に間違いないといい三田村氏は四十四年と記憶し、芳谷氏は四十五年ではないかという。いずれにしてもこの両年にしぼられる。オオカミがどこからきたかについては、三田村氏は当時小山谷方面でオオカミがたびたび現われ農夫と格闘したことも何度もあるところから、郊外の山からきたのではないかといい、青木氏によると当時足羽河原に矢野という動物園があり、ここから逃げ出したという伝説があったという。また勝山市の読者からのはがきでもオリから逃げ出したものであるという。もしそうとすればオオカミが人間に飼われていたという動物学的にさらに興味ある事実となるが、断定はできない。勝山市の読者の記憶では、なにかの展覧会で、オオカミのはく製をよく見たが、キツネ色で毛は硬く、

長野　一九一〇年の「純日本種狼」

犬とは違ってすごい感じだったという。

資料三『福井新聞（夕刊）』昭和三七年一月二三日（抄）

〝私は知っている〟の一人、福井市松本下町門長松さん（六九）は「あのオオカミは富山県の立山でつかまえたのを、矢野動物園が買った。それが逃げ出したものだ」と言い、その射殺までの経過を次のように話している。

明治四十五年の夏ごろ福井市内で矢野動物園が興行しており、興行を終わって関西へ行く途中、今庄駅でオリを破って脱走した。その後二、三日して鯖江市に現われ、長泉寺町の農家の幼児をくわえて逃げた。付近民に追われて幼児を捨て逃げた。さらに二、三日後福井市内の小山谷付近に現われた。これを某弁護士が発見、消防団員が総出で追い、オオカミは市内中心部に逃げた。オオカミはお堀に飛び込み水草にからまり逃げられないところを射殺されたという。その後はく製にされ小学校へ寄贈された。

また鯖江市有定町の福田甚二さん（六七）＝鯖江市遺族会長＝の話では、鯖江でのオオカミの行動がさらにはっきりしてくる。

明治四十四年ごろ福田さんは畑で大麻を刈り取っていた。だから六月ごろと推定される。福田さんが一匹の動物をみつけた。最初は尾が太く赤味のネズミ色なのでキツネだと思い、近くの日野川でアユ釣りをしていた大村というおじいさんに知らせた。ここでオオカミだとわかり農夫らがクワで追いかけた。オオカミは一・二㍍の垣根を飛び越え六、七歳の子供の足にかみついた。その後同市小黒町に現われ大久保六松さんという人の子供をくわえて山へ逃げた。途中で子供を捨てたが、大さわぎとなり部落総出でオオカミを捜した。

福井に現われてからのことについては福井市浪花中町木村長三郎さん（六四）の話がくわしい。小山谷方面に現われても子供にかみついたという。農夫がクワでオオカミをなぐりつけ、おシリに傷を負わせた。逃げ場を失い市中にはいり、人々は戸を下ろして警戒しているうちに、元の福井警察署（現錦上町）付近から東へ走り、現在の順化小校庭（当時お堀）付近から松平試農場にはいり、そこの練習生が射殺したという。ただオオカミがどこからきたかについて、木村氏は「矢野動物園から逃げ出したオオカミと福井に現われたオオカミとは違うオオカミで、逃げ出したオオカミは別の場所で殺されている」と話している。

資料四『福井新聞（夕刊）』昭和三七年一月二三日（抄）

同学会（日本哺乳動物学会―引用者注）の第六十一回例会は東京上野の国立科学博物館でオオカミの権威斎藤弘吉氏（日本動物愛護協会理事長）をはじめ二十人の会員が出席して開かれ、同博物館動物学科の今泉吉典理博が「明治末年福井で捕獲されたオオカミらしき写真」と題して報告を行ない、検討を求めた。会員は問題のオオカミの写真や福井新聞記事、福井から今泉博士に寄せられた資料を回覧したあと討論にはいった。

写真の動物がオオカミかどうかの点については、写真の撮影された時期が五―六月の脱毛期に当たり、抜け毛の状態をみるとオオカミ特有の抜け方をしており、首すじのようすからみてオオカミであることには全員意見が一致した。しかしこれがニホンオオカミかどうかについてはオオカミの形態、年代、捕獲されたときの状況の三点から追究された。

まず形態だがニホンオオカミはメキシコの草原オオカミとともにオオカミの中では最も小さいものに属する。ニホンオオカミの特徴はさらに足が短

く「フン」（吻＝目から前方の突出した部分）が短い。これにたいして朝鮮オオカミは大型で体長、体高ともにニホンオオカミよりも大きく、足、フンともに長い。写真から判断するとニホンオオカミより、朝鮮オオカミの特徴に近い。

捕獲されたときの状況ははっきりしないが、巡回動物園から逃げ出したという説が最も有力である。明治三十年以降巡回動物園が各地で興行しており「同四十三年に富山県東砺波郡で巡回動物園が興行中、オリの中からオランウータンが逃げ出し大騒ぎになった…という記録が残っている」（早稲田大高島春雄博士）日露戦争後、朝鮮オオカミを輸入して、ヤマイヌだとかニホンのオオカミだと称して巡回動物園が見せ物に用いた実例が多く、昭和の初期までもこの例が残っていた。オオカミは元来夜行性の動物で、家畜をおそうことはあっても人間を襲うことはやらないし、その実例はない。（斎藤氏）福井市小山谷で農夫が襲われ市街地へ逃げて行ったという説は、野性のニホンオオカミの習性からみて疑わしい。さらに当時の福井市はやはり都会であったはずで野性のオオカミの習性から考えて、郊外の山からまよい出し、中心部の堀の中に飛び込んで射殺されるということはとても考えられないという。これらの諸点からこのオオカミはニホンオオカミではないと断定された。

資料五「松平試農場誌（二）」（抄）

同年（明治四三年―引用者注）八月三日には野犬が福井城内に潜入したとの情報が伝わり、伝習生が総出動して捜索したが発見されなかった。ところが夕方になって寄宿舎付近に現われたため、ちょうど現場付近にいあわせた奥谷奥之助助手が銃で射止め佐竹正継（ママ）助手、稲垣正夫（ママ）研究生の両名がこん棒でうちたたき捕殺した。

七月三十日小浜で興行中の矢野動物館が汽車で小松に向かう途中満州産と称する灰色のオオカミ一頭が今庄―鯖江間で逃亡した事件があり、このことがあってから舟津村小黒町、有定、福井市西端小山谷村等で子ども数名が傷つけられ大騒ぎしていた時期でもあり四日朝福井中学動物学教諭羽金準一郎の鑑定を求めた。その結果は純粋の日本オオカミであるが矢野動物館のものかどうかは不明であった。一方同日午後矢野動物館員の松尾嘉蔵が来福し調査の結果同館所有オオカミでないことが明らかとなった。当時このニュースは「オオカミ城内を荒らす」と題し大々的に扱われた。写真は康荘の撮影した福井県最後のオオカミである。

これについて試農場は奥谷奥野之助に柳行り一組と円芸（ママ）調査書一冊を佐竹正継（ママ）、稲垣正夫（ママ）の両名には柳行り一組ずつをあたえて賞し松平邸からも三名に対し賞賜があった。

資料六『芸備日日新聞』明治四三年八月七日

●矢野動物園の狼（児童を殺傷す）屢々当地にて興行し皆人の記臆に刻まるゝ矢野動物園は頃日若狭国小浜の興行を終へ加賀国小松に向ふ途中去ぬる三十一日今庄鯖江間にて汽車に積込みありし灰色の狼一頭（矢野は之を満州産と称せしも日本産狼なる由）如何にしてか檻を脱けて逃げ出し鯖江附近船（ママ）積村字小黒町にて二歳の女児一人を噛殺し其他四人の児童に噛付きしより忽ち大騒ぎとなり非番巡査を召集し猟師を繰出し捜索したるが遂に偶然松平侯爵家試農場助手等に発見せられ撲殺せられしは同日午後七時なりきとぞ若しライオン、虎などの檻を破りて出しならんには其惨禍更に大いなりしなるべし是に鑑みて今後は一入警戒すべきなり

長野　一九一〇年の「純日本種狼」

資料七『北國新聞』明治四三年八月六日

▲福井矢野動物館の狼脱檻し小児を噛殺す興行主の無責任は噛殺しても尚足らじ

資料八『東京朝日新聞』明治四三年八月六日

●狼福井市を騒がす

▽汽車中の狼脱檻し

▽数名の幼女を咬む

過日来若狭小浜にて興行中なりし矢野動物館は更に加賀金沢に向ふべく去る三十日夜檻に入れし種々の動物を敦賀より汽車にて輸送中今庄鯖江間にて満州産と称する灰色の狼一頭如何にしてか檻を脱して逃げ去りたるを福井駅にて発見し大騒ぎとなり直に届出でたるが三十一日鯖江附近の船津村字小黒町に狼に似たる一頭の怪獣現れ出で山本六松の長女ささを（二才）に咬付きて遂に惨殺したる上同村字有定にて福井次郎右衛門の二女わさ（五才）の右股に咬み付き次で神明村字水落に現れ山本亀次郎の妹きくえ（五才）の右股二ヶ所に咬み付き長泉寺山に逃込みたるを鯖江警察署にて聞込み多分狂犬ならんと非番巡査を集め猟師数名を雇ひ四五頭の犬を殺したるが其中最も大なる灰色の一頭は何れともなく逃去りたり然るに一日福井西端小山谷村にて二人の小児を追廻し一名の臀部を噛み取たる灰色の怪物ありとの報あり福井署にては全く動物館の狼なるべしとて各署に通報して警戒中件の怪物は三日朝突如として福井市佐佳枝下町に現れ夫より旧城の濠を渡りて松平侯爵邸に入り同邸の表門より出で、同家家扶児島氏の宅を通り抜け旧福井城の本丸に入りたり松井家（マヽ）にては試農場の農夫及び講習生約三十名繰出して本丸及三の丸等を隈なく求めたるも見当らず午後五時一旦捜索を中止し農場助手奥谷武之助（マヽ）外二名は入浴の為外出せしに其際又々右の怪物を認めしより三名は手に手に棍棒を持ち前後より挟み撃ち辛うじて撲殺したるは午後七時頃なりき斯くて四日朝に至り福井中学動物学教授に鑑定せしめたるに全く日本産の狼にして可なり年を経たる雌狼にて而も未だ分娩したることなく且歯牙等の完全なるより見れば多分人に飼養せられしものならんとあり全く矢野動物館の狼に相違なからん（福井電報）

資料九「雑日記 明治四十三年」松平文庫（福井県文書館保管）

八月四日　　雷雨后晴

農夫ハ被袋造

生徒ハ天牛卵駆除

狼捕殺　昨三日野犬城内ニ入レリトノ報アリ、総出シテ捜索セシモ発見セス、然ルニ夕景ニ至リテ寄宿舎附近ニ現ハル故ニ折節在場ノ佐竹・奥谷両助手及稲垣研究生ノ三名、外ニ一二名手伝ヒテ包囲シ、奥谷ハ銃ニテ射留メ、佐竹・稲垣両名ニテ打撲シ、遂ニ捕殺ス、即チ巨大ナル豺ニシテ体量五貫目アリ、伝ヘ云フ、数日前鯖江ニテ小児数名ヲ傷ケタルモノ、逃レテ茲ニ至レルモノナリト云フ、本日本邸ニ於テ写真セラレタリ

右ニ付テ本日奥谷助手柳行李一組及ヒ園芸調査書一冊ヲ佐竹助手及稲垣研究生ニ柳行李一組ツヽヲ賞与ス、本邸カラモ右三名ヘ御賞賜アリタリ

資料一〇「家譜　康荘公　自明治四十三年一月一日至仝十二月三十一日」越葵文庫（福井市立郷土歴史博物館保管）

八月四日　昨三日城内又は試農場へ出没セし狼、試農場伝習生稲垣正男、助手奥谷奥之助、仝佐竹政治の三名にて打殺、退治に付、骨折慰労として金壱円五拾銭賜はる